



祝福のカンパネラ

- la campanella della benedizione -

Festa della Carina

Original Story

ういんとみるOasis

Story

三日月堂&ハムれんたろー

Illustration

白桃&たがやKI&なつめえい

祝福のカンパネラ

- la campanella della benedizione -

Festa della Carina

Main Character's

Carina Verritti

カリーナ・ベルリッティ

エルタリアのクラン『Oasis』のオーナーにして、この国の公女。その美貌もあいまって、広く名が知られている。気さくで誰とでも仲良くなれる性格。普段はたおやかな才女の姿勢を崩さないが、よくおろおろしたりしている。この世界では使われなくなった技術である魔法を使うことが出来る。手にしている杖は『モンテッキア』。意思を持ち、体の弱い彼女の状態を確認するなど主のサポートを行う。



Salsa Tortilla

サルサ・トルティア

リトスの双子の姉であり、突っ込み担当。冒険者クラン『Oasis』のライバル『トルティアカンパニー』副社長。明るく元気な性格だが、物事を深く考えるのが苦手。反面アイテムなどの使用に長けている。



Ritos Tortilla

リトス・トルティア

サルサの双子の妹であり、『トルティアカンパニー』のクールな社長。物事を冷静に判断し行動する理論派。無表情で淡々と会話を行うも、ちょっぴり毒舌家。失敗の多い姉のサルサをからかってはこっそり楽しんでいる。





Agnes Boulange

アニエス・ブーランジュ

各地を旅する自称“世界一の人形師”。容姿は若いが豊富な経験を持ち、どこか大人びた印象を与える。

自他共に認める甘いもの好き。また悪戯好きでお調子者だが、空気を読むのが上手く、嫌われるようなマネはしない。



Minette

ミネット

およそ7年の眠りから目覚めた、人間型のオートマタ（自動人形）。

体の構造から精神までどこをとっても人間と変わらない。天真爛漫で好奇心旺盛の元気な天然娘。クランメンバーだけでなく街の人々からも可愛がられている。



Chelsea Arcot

チェルシー・アーコット

収穫祭で開かれる『アーティファクト展示会』の警備の為やってきた神殿騎士。剣の腕は確かなもので、仲間からも信頼を得ている。

丁寧で静かな性格だが、ドジなところがあり、方向音痴でよく街中で迷っている。



Nina Lindberg

ニナ・リンドベルイ

『Oasis』の事務・家事全般を一手に引き受ける、クランの母親的存在。

元々はカーリーナの専属メイドとして、ベルリッティ家に仕えており、カーリーナのことを第一に考えている。

実は人間離れした酒豪。



本編の主人公。
冒険者クラン『Oasis』に所属
する冒険者にしてアイテム技師。
その技術には定評がある。
優しく穏やかな性格ながら、芯
に正義感を持ち、『当たり前』の
ことを『当たり前』にこなすこ
とができる。天然女殺し。

Leicester Maycraft

レスター・メイクラフト



Sub Character's



Miriam

ミリアム

アバディーンの妹でありミネ
ットの友人。
体が弱く、杖を突いて歩いてい
る。傍げな印象にも見えるが、
芯の通ったところも見せる。



Avril

アヴリル

アバディーンとミリアムに仕え
るオートマタ。二人のことを何
よりも大切に考えており、その
為に過激な手段を取る事も。
意外と目利きでもある。



Garnet

ガーネット

とある事件で知り合った精霊の
少女。実際はドラゴンの化身。
強気で偉そうだが愛嬌があり何
故か憎めない。古代の知識を持
っている為、意外と博識。



Shelley

シェリー

Maycraft

メイクラフト

レスターの実の母親。息子を自
分好みに育てたと豪語するほど
ノリノリで破天荒なお母様。
レスターの周りに女の子が大勢
いることをとても喜んでいる。



Aberdeen

アバディーン

アニエスの兄弟子に当たる人形
師で、ミリアムの実兄。
揺ぎない信念を持ち、あること
が原因で『Oasis』と対立して
いたが、今は和解している。



Nick

ニック・ラジャック

La'juck

レスター達が新米だった頃から
の仲間で、優しく力持ちな皆の
兄貴分。しかし強面のせいで色
々と損をしてしまうことも。
斧大好きな斧マニア。



プロローグ

「えへへ、パパあ」

砂糖菓子のような甘い声が耳^じ朵^だに届く。

それと同時に、心地よいまどろみの中にいた青年は、柔らかくて温かいものが、ぎゅっと押し当てられてるのを感じた。

青年　冒険者クラン『Oasis』に所属する若き冒険者にしてアイテム技師、レスター・メイクラフトは息苦しさに、目を覚ました。

「う、うう……」

まぶたを開くと視界が肌色とごく僅^{わず}かな薄桃色で埋め尽くされていた。ふにふにとした柔らかい感触が伝わってくる。

誰かが抱きついてにいるようだ。そう判断したレスターは、抱きついている人物の顔を確認しようともぞもぞと頭をずらした。

「うっ……ミニネット?」

抱きついていたのは、レスターをパパと慕^{オイトマタ}う自動人形の少女ミニネットだった。

その身体は一切の衣服を身に着けておらず、未成熟な肢^し体^{たい}をあらわにしている。

レスターは呼吸を楽しむため、ゆっくりと頭を動かした。

途中、薄桃色の突起にくちびるがひっかかり、ミネットが微かに震える。

色々な意味で遠くなりそうな気を必死にとどめつつ、レスターはやっとの思いでミネットの拘束から抜け出した。

ミネットはまだ寝ているようだ。

「……ふぁ……ん？ あれ、レスター？」

ミネットの反対側から聞こえてくる声に視線を向ける。

そこにはレスターの腕を枕にしている少女の姿があった。

同じクランに所属する自称『世界一の人形師』アニエス・ブーランジュだ。

もちろん、彼女も一糸まとわぬ姿である。

「おはよう、アニエス」

「うにゃー、おはよう……」

まだ寝ぼけているのか、アニエスは返事をしたものの、目はほとんど開いていない。

アニエスが親猫に甘える子猫のように身体を摺り寄せてくる。

レスターは彼女の頭を優しく撫でた。

就寝前に髪の毛を下ろしたためか、彼女の雰囲気はいつもと違っていて、どこか女性としての艶やかさを感じさせる。

レスターたちが寝ていたのは、寝室のほとんどを埋め尽くしている巨大なベッドの上。

キングサイズのベッドをふたつ並べて、四、五人が同時に眠れるようにしたそれは、レスターと『Oasis』の女性たちが想いを通じ合わせるようになってから用意したものだ。

レスターが、柔らかなウェーブを描くアニエスの髪感触を楽しんでいると、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「レスター、起きてますか？」

「あ、うん。起きてるよ」

そう答えると、ドアが開かれ、美しい金色の髪を腰の辺りまで伸ばした少女が入ってきた。

彼女はカーリーナ・ベルリッティ。レスターたちが住む都市国家エルトリアの公女であり克蘭『Oasis』のマスターでもある少女だ。

春の日差しを思わせる優しい眼差しで、誰に対してもわけ隔てることなく接することから国民から『エルタリアの宝石』と呼ば慕われている。

「おはよう、カーリーナさん」

「おはようございま……」

挨拶の途中でカーリーナの笑顔が固まった。

「あ、おはよう、カーリーナさま」

ドアが開く音で意識がはつきりと覚醒したのか、しっかりと目を開いたアニエスも朝の挨拶を返した。

もちろん、レスターに抱きついたまま。

次の瞬間、カーリーナが指でもくわえそうな様子で羨望せんぼうの声をもらした。

「ミネットちゃんとアニーちゃん、うらやましいですよ。」

訂正。実際に指をくわえている。

苦笑しながら、レスターは身体を起こした。

「昨日はわたくしの番でしたのに」

カーリーナの羨ましやいひそうな声に、シートで身体を隠しつつアニエスが答えた。

「あははは、ごめんね。でも、カーリーナさまって、今は収穫祭絡みで忙しくてこっちにいられないじゃない。そしたら、レスターがひとり寝は寂しいっていうから」

「いや、そんなこといってないんだけど……」

実のところ、そのようなことをレスターは明言していない。

昨夜、ひとりで寝ようとしたところに彼女たちが寝室にやってきたのである。

もっとも、それを受け入れた時点でレスターにそういう考えがなかったというわけでもないだろう。

「ところでカーリーナさま、今日は時間大丈夫なの？」

「ええ、今日はお客様もいらっしやらないので、お休みをもらえましたの。久しぶりに一日一緒にいられますのよ。ですから、レスターを起こしに来たんですのに……」

「そうなんだ。だったら、はい、どうぞ」

レスターの背を押しながら、アニエスがいう。

「？」

レスターはカーリーナともどもきょとんとした視線をアニエスに向けた。

「存分にレスター分を補給してね」

「アニーちゃん、ありがとうですの」

「レスター分ってなんだい？」

自分の名前が入ったあやしい単語を無視できず、レスターは聞き返した。

「ん？ それはね」

チェシヤ猫のような笑みを浮かべつつ、アニエスが答えを返してくる。

「レスターに抱きついてると補給できる成分で、恋する乙女にとってかせないものなんだよ。こ

れが不足しちゃうと、それはもう大変なんだから。ね、カーリーナさま？」

「ええ、そうですのよ。それではお言葉に甘えて」

アニエスの言葉に同意したカーリーナが満面の笑みを浮かべながら、レスターの胸に飛び込んできた。

「おっと」

レスターは優しくカーリーナを受け止めた。

すると、彼女が持つ『Oasis』一のサイズを誇るバストがレスターの胸板にぎゅっと押し付けられた。たわなに実ったそれがふにゆりと形を変える。

思わず視線が向いてしまうのは男性ならば仕方ないことだろう。

しかし、そこは女性に対し紳士たれと育てられてきたレスター。凝視するようなことはせず、ちらりと視線を向けてしまふも慌てて、それを逸らした。

「うふふ、レスター」

幸せそうに、カーリーナが頭を摺り寄せてくる。そのしぐさは、のどを撫でれば猫のようにごろごろと鳴くのではないかと思わせるほどだ。

そんなカーリーナたちの騒ぐ声で目ざめたのか、ミネットが目をこすりながらゆっくりと身体を起こした。

「……おはようです、パパ、アニエス。ふや？ カーリーナもいます？」

昨夜はいなかったはずのカーリーナが、レスターに甘えている姿に、ミネットはパチクリとまばたきをした。

「おはようございます、ミネットちゃん」

「おはようです。……カーリーナはいつ来たんです？」

小首をかしげながら、ミネットは訊ねる。

「ついさっきですわ。それで今はレスター分の補給中ですよ」

「パパ分……？」

「ええ、これがあるとすつごく元気になれるんですの」

「ふえー、だったら、わたしもパパ分補給するですよ！」

ぎゅっとミネットが腕に抱きついてきた。

ちなみに、いまだ彼女は裸のままだ。

カリーナに比べると、明らかにポリウム面で劣っているものの、未成熟ゆえに持つ、ぷにぷにとした感触と絹のようになめらかな肌触りが感じられる。

「ちょ、ちよつと待って、ふたりとも」

朝からこれはさすがにまずいのでは。

そう考えたレスターは、ふたりを止めようとした。しかし

「それじゃ、あたしも！」

「うわっ!？」

今度は後ろから、アニエスが抱き付いてきた。

その身にまとっているのはシーツのみ。

小ぶりだがしつかりと自己主張しているふたつの果実の感触が伝わってくる。

「んふふー、どうかにやー、レスター？」

いたずらっぽく微笑みながら、レスターの横顔を覗き込むアニエス。

「うふふふ、レスター」

とろとろにとろけそうな、というよりはすでにとろけきった表情のカーリーナ。

「ふやゝ、パパ」

小動物のように無垢な愛情を向けてくるミネット。

世の独身男性の恨みを一身に負いそうな状況にレスターが追い込まれていく中、半開きになっていたドアから、新たな人物がやってきた。

「おはようございます、ご飯の用意が出来て……」

薄紫色の艶やかな髪を軽やかに揺らして、顔を出してきたのは、チエルシー・アーコットである。彼女は神都ラングバースが誇る神殿騎士団に所属しているが、ひょんなことからレスターたちと知り合い、以後、冒険に協力することになった。

普段は騎士団の宿舎に寝泊りしているのだが、今日は用事があったのか、朝から『Oasis』に来ていたようだ。

レスターたちの姿を目にした彼女の頬が朱に染まる。

「ご、ごゆつくりどうぞ……」

足早にドアから遠ざかるうとする彼女に、レスターは声をかけた。

「いや、チエルシーさんっ、あの、ちょっと!」

レスターの声が聞こえたのか、パタパタと戻ってくる足音が聞こえてきた。



入り口から少しだけ顔を覗かせて、おずおずとチエルシーが訊ねてくる。

「あ、あの二ナさんには伝えておきますので。ええと、一時間後、でよろしいですか？」

チエルシーの言葉に、レスターは慌てて首を横に振った。

「いや、そういうのじゃないからっ」

「……で、では、一時間半……くらいですか？」

さらに顔を引つ込めたチエルシーが恥ずかしそうにぼそぼそと呟いてくる。

ひとり当たり三十分として、三人で九十分。つまり一時間半。

レスターは思わず、頭の中でそんな計算をしてしまう。

彼女とのやり取りに「前にもこんなことがあったような」などと考えつつ、レスターは誤解を解こうとする。

ところが、レスターが次の言葉を発する前に、カリーナが予想外の一言を発した。

「チエルさんも一緒にどうです？」

彼女の性的には「一緒にレスター分を補充しませんか」という意味合いだったのだろうか。

しかし、当のチエルシーはそう受け取れなかったらしく、その言葉を聞いた瞬間に顔全体を真っ赤に染めて、うつむいてしまった。

もじもじしながら、チエルシーが上目で見つめてくる。

「え、えっと……」

凜としたお姉さんの彼女から向けられる上目遣いに、レスターは口にしようとしていた言葉を飲み込んでしまう。

「……で、でしたら」

レスターにギリギリで聞こえる程度の小声で話すチエルシー。

「二ナさんには……二時間ほど待つて欲しいと、伝えてきます」

いそいそときびすを返して、チエルシーは一階で朝食の用意をしている二ナの元へ向かった。

「ちょ、ちよつと待つてっ」

「あん、レスター動かないでくださいまし」

手を伸ばすレスターの目の前で、パタンと音を立ててドアが閉められた。

レスターの耳にパタパタと急ぎ足で階段を下りる足音が聞こえてくる。

レスターが彼女たちの想いを受け止め、今のような関係になってから、日常となった朝の風景。たくさんの幸せとちよつとの苦勞に満ちた一日が今日も始まるうとしていた。